

## 文字の単位と機能

(文字の意味論 1)

古 屋 俊 彦\*

(2000年1月15日受付, 2000年1月28日改訂)

## Units and Functions of the Letters

(Semantics of the Letters 1)

TOSHIHIKO FURUYA\*

**Synopsis:** The letters as a fixedness have no inside-structure what the language as a activeness have. Because the letters are not active. The units of language are the surrender of functions step by step to a fixedness. The principle binomial-opposition on the distinctive features dissolve inside of the phonemes. The phonemes and the monemes deny each other concerning the distinctive functions. The language expunges the acoustic continuity and depends on the fixedness negatively. The letters begin with the negative writting of units by the language, and by way of the integration step by step, they reach the single-information as a meaning. The meaning is the erasing step by step, therefor the letters survive as redundancy. The letters which are written in as the negative identities remain as it is on account of the selfsufficiencial disappearance of the language. The incompleteness and the suspension by interruption motivate the letters to the construction on linear phase.

### 1. ま え が き

我々は前回の論考において、文字の現時点での状態、現時点での残存を、文字の問題とは区別すべき様々な事象を差し引いていくことで確認してきた。そこで浮かび上がってきたのは、保存性や言語活動に対する過剰として規定された文字の無際限の固定性、体系や構造からの残滓が織りなす沈殿の形であった。我々はそこから一步進んで、文字の惰性的構築が向かう方向と、その構築の手続き全体が一つの虚構として封印される境界線から、既に見てきた文字の沈殿の静かな進行を順次再確認する。ここからは、意味と呼ばれる作用が、文字にとって実質的にどのような手続きと関わるのか、また、文字の構築に関して、それがどのような動機付けになっているのかという考察が始まる。この論考では、文字の単位と機能の書き込みに関する言語の関与と不関与について論じる。

---

\* 情報科学センター  
Center for Information Science.

## 2. 言語の単位と機能

### 2.1 固定性としての文字と活動体

文字は、我々が恐らくおよそ五千年前に意図的に産み出した、きわめて具体的かつ現実的な事物である<sup>(脚注1)</sup>。しかも、そのことは、この五千年間の蓄積によって、全てが現時点で確かめ得る。部分的にも全体的にも、五千年間全く変わらず、文字は今と同じように目の前に一つの現実的な作業として継続してきたし、残存物として存続し続けたはずである<sup>(脚注2)</sup>。誰も、かつて書かれた文字が自然に変形したとか、書いていない文字が自然に発生したことがあるとは考えないし、過去に書かれた文字の出自に関する不明瞭さや事実誤認が様々にあるとしても、過去から残された文字の実在性そのものを疑う人はいない。文字は、個別的な作業の継続としては人為性の典型であり、事実に痕跡の量的な拡張としては惰性的固体性の典型である。実際に文字の発明が五千年前に行われたということを特定する手段は、今のところない。現時点で、それ以前の時代から文字と断定できるものが残されていないということによって消極的に特定されているだけである。しかし、ここで問題になっているのは、そのような歴史的な事実認定や人間の能力の価値判定ではなく、現時点で残された全ての文字に関する固定性と実在性についての認識そのものである。確かに、他の全ての事物と同じように、文字もまた時間と共に劣化し、失われてしまうということもある。文字の媒体が文字を道連れに崩壊への道を着実にたどる。それ故、実際には、様々な事情から、現時点での文字がそのままの形で残存するという事はあり得ない<sup>(脚注3)</sup>。場合によっては、蓄積された文字の存続が、大規模な危機を迎える可能性も否定できない<sup>(脚注4)</sup>。だが、蓄積され集積された文字の大規模な存続とその部分的な現前は、我々が様々な活動を持続する中で、無意識のうちに依存せざるを得ない、固定

- 
- (1) 文字の使用は、現在のイラク南部シュメール地方に位置する古代都市文明の中で、紀元前三千年以前に始まったと言われている。最初の文字はシュメール線文字と呼ばれ、粘土板の上に尖筆で表記された。この文字は、並び方が線的な連続性を持つ今の文字とは違い、縦横に並んだ升の中に平面的に字が配置された表記である。
  - (2) 失われた文字は勿論除外する。
  - (3) 例えば、古代メソポタミアの粘土板文書や古代エジプトの碑文などは現物がそのまま残っている。しかし、古代ギリシャの文書を含む殆どのパピルス文書は、古代から中世を経て順々に手で書き写されて受け継がれたものである。そしてこの場合、書き写す価値がないと見なされた文書は、そのまま消滅したと考えられる。ただ、時代的要因や地理的要因や物理的要因などの様々な事情により、その文書が失われてしまうかどうかは全く不確定である。それ故、文書の存続に自然的淘汰や人為的淘汰などの原因を求めても意味がない。反古紙として裏張りに使われたために後世に残されたような一連の文書というものもあるのだ。
  - (4) プトレマイオス朝古代エジプトのアレクサンドリア図書館は、ローマ軍の破壊により全ての蔵書を失った。だが古代メソポタミアにおけるように都市の破壊に伴う図書館の焼失が粘土板文書の耐久性を高め、結果的にそのようにして焼かれた文書だけが残るという逆の場合もある。

性一般の堅固な中核である。我々は、そのため、文字の固定性と実在性についての認識を再確認しなくてはならない。必ずしも、我々は自らが依存している固定性を正確に認識しているわけではないからだ。

固定性と活動体とは人為性を大きく二つに分けており、我々は人為性の継続を固定性の側に、人為性の解消を活動体の側に負っている。人為的なものの中でもっとも活動を停止しているという意味で、文字をここではしばしば固定性と言い換えることにする。また、それ自身を完全に人為的とは言えないが人為的なものの活動主体という意味で、言語をここではしばしば活動体と言い換えることにする<sup>(脚注5)</sup>。固定性と活動体とは、人為性の存続にとってどちらも不可欠である。ただ、我々はどちらかというとな為性を活動体として解釈する傾向にある。この解釈の傾向は、人為性を自然の摂理や論理的整合性へと帰着させようとする全く正当なものである。だが、これによって我々は自らに残されたものがなんなのかがまるでわからなくなる。解釈の対象となる人為的なものは、解釈のための単なる手段だったのか。もしそうだとすれば解釈そのものが解釈のための手段となり、解釈の反復は我々に対象の原理的喪失をもたらすことになる。幸いにも、我々は活動体と固定性とを部分的に混同してしまうことが多いし、解釈の挫折や中断が解釈の完了を妨げているために、このような極端なことは、たまたま起こらなくて済んでいる。我々は、結局のところ固定性の前で挫折や中断を免責され、不可逆的に固定性の内部へと取り込まれて行く。つまり、解釈の正当性がその都度無効にされることによって、人為性の存続は保たれているのである<sup>(脚注6)</sup>。しかし、このような存続の仕方は極めて不安定であり、我々の態度は不健全と言わざるを得ない。我々がやらなければならないのは、まず固定性の領域を活動体の解釈から常に保留しておくことである。この固定性は、勿論単なる虚構でしかないかもしれない。というよりは、これが全くの虚構であることもまた、我々にとっては自明のことなのである<sup>(脚注7)</sup>。ただ、この虚構は、我々にとって最終的なものであり、いかなる実在性もその向こう側には存在しないような虚構である。我々は、過去においてその虚構の書き込みとしてしか領域を持っておらず、我々にとっての実在性は全てその虚構の手前へと折り返される。従って、重要なのは虚構が虚構の内部に持つ相互作用である。その相互作用

- 
- (5) 必ずしも、文字と固定性、言語と活動体を、その境界線の等しいものとしているわけではない。文字を固定性という規定によって、また言語を活動体という規定によって、順次拡張された概念として定立するのが目的である。
- (6) 解釈の挫折や中断は、人為性にとって本質的なものである。解釈の完了は常に挫折や中断へと送り返される。解釈は完了しないことを保証された活動体の存続である。解釈の端的な完了は、固定性と活動体の分離でしかない。分離によって活動体は消滅し、固定性はひたすら沈殿する。
- (7) 当面利用することも確認することもできていない固定性としての文字の実在性は常に虚構である。しかし、これは虚構の状態でも機能を持つような虚構である。なぜなら、確認したものと確認していないものとの関係は複雑な体系を作り上げるからであり、その場合、体系の実在性は確認していないものの側に必然的に結び付くからである。つまり、この虚構が持つ機能は読まれていない文字が実際に持つ機能でもある。

用が、最終的になにを残存させるのかということは、対立する複数の作用が持つ付随的な同一性によって検証できるであろう。それ故この考察は、再び否定的なものになる。ただし、この否定性は、解釈項の減算によって現れるような極小値ではないが、とりあえず複数の作用の不純物に含まれる冗長性によって、思いがけず浮上する方向性ではあり得る。

その方向性とは、文字の増殖に関わる方向性である。文字はなぜ量的な増加へと向かうのか、そしてその増殖はいかにして行われるのか。文字の集積はいかなる形を持っているのか。文字は無制限の集積へと向かっているのか、また向かうべきなのか。このような問題が、固定性の虚構から浮上してくる。これらは、いままで固定性としての文字に即して考えられたことがあまりない問題である。我々は、固定性一般の利用のみを考え、固定性を言語のような活動体の内部に消化されたものとしてしか考えようとしなかった。しかし、そのようなときに扱うことができたものは、高々目の前の僅かな現前性でしかない。我々が利用し得る文字や、加算し得る文字などは、文字全体から見ればほんの少量である。消化された少量の文字とそれ以外の大量の文字との間の対立関係は、文字の利用や加算の場そのものを常に支配している。それにもかかわらず、我々は目の前の僅かな現前性だけによって文字の性質や機能を特定してしまう傾向がある。このような我々は、文字の集積の内部構造に関与し得ないと考えるべきだろうか。このことは、固定性の虚構の性質を考えれば別の解釈もできる。固定性の虚構は最終的なものであり、利用し得ない大量の文字が特定の機能に向けて待機しているような固定性の内部構造という形で実在しているわけではないということ。つまり、残余の固定性は常に内部構造をその固有のものとしては持たないということである。これは、固定性の実在そのものへの懐疑では全くない。むしろ、固定性を外部構造としてのみ記述し、現状を維持し、増殖させることの正当化である。固定性としての文字とは比喩的に言えば書かれたが読まれていない文字一般のことである。それは、機能的な分節、意味の理解、解読や解釈、価値評価などから逃れて残存した文字の巨視的な形である。

## 2.2 言語の純粋性と停止

固定性の外部構造とは、固定性の外部からの働きかけの構造ではない。むしろ、常に固定性そのものに残される構造を意味する。内部と外部という見方は、活動体に視点を置いた見方である。固定性にとっては内部は存在せず、外部だけが端的にその書き込みとして存在する。それ故、固定性の外部構造とは、固定性自身の構造ということになる。固定性の構造は、それ自身に根拠を持つ必要があるが、固定性が活動体と部分的に混同されている現状では、固定性の性質からそれを導き出すことは、固定性を活動体の構造として規定することと同じである。そのため、まず、常に固定性の反対側で活動体の純粋な性質を特定し、活動体による固定性の切

り取りを特定し、純粋な固定性に残されるものを観察することになる。固定性としての文字の中に単位と機能を特定しようとする考えがここではまず問題になる。この場合に最終的に単位の切り出しの根拠となっているのは、言語の単位だからである。文字は言語的な書き込みと理解される限り、それは当然のことである。固定性が活動体から離れたものであることを理解するためには、恐らくその部分が最も重要である。さしあたって、活動体としての言語の単位と機能の追求例を検討する。

自然的であれ実体的であれあらゆる所与性を言語の研究から除外し、記号の純粋価値の事実と聴覚的な弁別の事実との関係に立脚することによって、言語学は単位の研究を厳密化した。その端緒となったフェルディナン・ド・ソシュール (Saussure, Ferdinand de) の一般言語学は、言語の基礎的な原理の根幹を射程に納めている。そこでは、活動体としての言語の中には関係だけがあり、その関係はそれが対応する観念や事物や意味などの現実に行先し、実際に現象となって現れるのはその後であるということが強調される。

「他の科学であると、前もって与えられた対象 (objets) を取り扱い、ついでこれをいろいろの観点 (points de vue) から眺めることができる。我々の領域ではそうはいかぬ。誰かがフランス語の nu という語を発音したとする。通り一遍の観察者ならば、そこに言語学の具体的な対象を見かねない。ところが少しく注意を払うならば、眺め方のいかにによって、全然相異なる三つ、ないし四つのものが見出されよう。すなわち音とも、観念の表現とも、ラテン語の nudum に相当するもの、などとも見られる。観念に先立って対象が存在するのではさらさらなくて、いわば観念が対象を作り出すのだ。かつは問題の事実を考察するこれらの見方の一が他に先立ち、あるいは勝っていると、あらかじめ告げるものは、なに一つ無いのである」<sup>2)</sup>(脚注8)

言語にはあらかじめ与えられたなにものかを前提することができず、言語には事物の間に関係が事物よりも先にあるということを認めるならば、当然、様々な物質的な条件と共に、実体性を帯びた単位は言語から排除されることになる。単位は、言語のもとになっているのではな

(8) 「言語研究の題材を掘り下げるにつれ、いよいよ得心のいく一つの真理がある。それは、独特の反省に人を誘うもので、このことを偽るのは無駄であろう。その真理というのはつまり、この領域では、事物の間に結ばれる絆は、事物そのものよりも先にあり、むしろそれを決定するのに役立っているということだ。他の領域では、まず事物が、与えられた対象というものがあり、次にそれが様々な視点から自由に検討される。こちらでは、正否はともあれ初めに視点が、しかもただひたすら視点だけがあり、そこから事物が二次的に創り出されるのである」<sup>3)</sup>「言語学で禁じられているのは、一つの事物を、様々な視点にまたがって語ること、あるいは事物を一般的に語ることだ。なぜなら、事物を作っているのは、視点そのものなのだから」<sup>4)</sup>「二つの記号が音韻変化によって混同されるようになる。すると観念の方も、一定程度(他の要素の総体によって決められた)に混同されるようになるだろう。また一つの記号が、同じように盲目的なやり方で差異化されるとする。すると必ず、この生まれたばかりの差異に、一つの意味が結びつけられるのである」<sup>5)</sup>

く、逆に単位が言語によって作られているという考え方は、帰納的に検証された関係性の超越論的な先行を含意しているかもしれない。しかし、関係が事物に先行しているというときの関係は、事物の偶有性に対する形式的な本質という意味での実体形相のような同一性でもなければ、変化における不動の量的な関係性という意味での関数概念のようなものでもない。ソシュールが強調するのは、むしろ、言語があくまでも慣習的なもので、事物の自然的関係から切り離されており、そのため超越論的条件ではなく、特定の歴史的條件に完全に従属しているという点である。

「言語が一個の純然たる制度であることをはっきりさせるために、Whitney が記号の恣意的特質を力説したのは、妥当である。かくして彼は言語学を真正の軸の上に据えたのである。しかし彼は行けるところまでは行かなかった。そしてこの恣意的特質こそ言語を他の一切の制度から徹底的に引き離すということを見逃した。そのことは、それが進化する模様を見れば、よくわかる。これほど複雑なものはない。同時に社会大衆と時間の中に位置を占め、少しでもこれを変えることは、誰にもできない。また一方、その記号の恣意性は、音的資料と観念との間に任意の関係を立てる自由を、理論的に伴う。その結果、記号のうちに結ばれたこれらの二要素は、他では知られぬ比をなして、それぞれ固有の生を営み、言語は、あるいは音を、あるいは意味を襲うありとあらゆる作因の影響下に、変遷いや進化することになる。この進化は宿命である。それに逆らった言語の例は一つもない。ある時間の終わりには、必ず目立ったずれが認められるのである」<sup>6)</sup>(脚注9)

恣意性を強調することによって、ソシュールは、言語をあくまでも人為的で社会的な価値の体系と規定する。これは、言語が固定的なもの一切から解放された自由なものであることを示している。言語の固有の生は、無限大の速度で回転する回転体の上に乗っているようなものだ。しかし、言語は我々の活動の全体を常時支配している慣習の中の慣習であり、我々の活動にとって唯一の現実的規則である。この自由と規則の一致という逆説は、我々の活動を純粋な活動体の活動として規定することの逆説である。ソシュールによれば、価値の体系は時間に対して二つの面を持っている。一つは同時性 (simultaneite) あるいは共時態 (synchronie) で

(9) 「我々の立場から言えば、この問題は、これまで人知の及んだところとはおよそ懸け離れた事柄を問いつめることに帰着する。それは、結局一つの契約的な (conventional) 事象、人為的かつ社会的な事実というものが果たしてあるのかを問うことである。社会的な生の中にあるこの事実は、任意の時代における一個の定式に還元できる。そこでは、この定式は、契約的 (conventional) であり、故に恣意的 (arbitraire) でもあって、それは事物の自然的関係から完全に解放されている。それは、この関係に対して絶対的に自由であり、無法則なのである。他方このような定式も、それ自身の中では恣意的ではなく、先行する同類からも自由ではない」<sup>7)</sup> 「一定の時代においては、言語は、隅々まで排列された一個の体系を示しており、それは、事物に依存しているが、事物に対して自由であり、恣意的である。恣意的契約を表すこの同じ言語が、体系をなしていない事実の群れからは、自由ではない」<sup>8)</sup>

あり、言語の状態を表している。もう一つは継起性 (successivite), あるいは通時態 (diachronie) であり、言語の変遷を表している。共時態は、個人的な話者にとって言語として存在する唯一のものである。

「同時性の軸, これは共存する事物のあいだの関係に関わる。この上では時間の干渉はみじんもない。継起性の軸, この上では、同時に一つ以上の物を考察することは決してできない。ただし第一軸の事物はことごとく変化しつつこの上に位する。価値を扱う科学にとっては、この識別は実践的必然となり、ある場合には、それ自体として見た価値の体系と、時間に即応して見たこの同じ価値とを識別しないでは、その探求を厳密に組織することなど、到底できない相談である」<sup>9)</sup> 「同一対象に関する二つの秩序の現象の対立および交叉を、更にはっきり記すには、共時言語学および通時言語学と称した方がよいと思う。我々の科学の静態的部面に関わるものは全て共時論的であり、進化と関係のあるものは全て通時論的である。同じく、共時態および通時態は、それぞれ言語状態および進化位相を示すこととする」<sup>10)</sup> 「眼の前にあるのは状態である。それ故この状態を理解しようと思う言語学者は、それを産み出したものを一掃し、通時態を無視すべきである。過去を抹殺しない限り話手の意識の中に入ることはできない。歴史の介入は、彼の判断を狂わすだけである」<sup>11)</sup>

過去を抹殺して理解しなければならない言語とは、純粹な活動体としての言語である。現に活動している言語の状態を記述しようとするれば、言語の歴史的な変遷などから切り離された同時的な関係として言語を捉えなければならない。それ故、活動体としての言語の単位を特定する場合は、この共時態の中にある。共時的言語はいわば個人的な体系であると同時に、集団的意識の継続を前提にした完全に仮説的な体系である。恣意性によって自然的関係から切り離されたこの体系は、その実在性を実証することが原理的にできない。これが話者にとっての唯一の実在であるという事実は、活動体としての言語そのものの仮説性を逆に示している。つまり純粹な活動体としての言語の体系は、永久に実証できないことを保証されることにより自律の根拠を得た純粹な仮説体系である。活動体の側から見れば、共時態は仮説的な停止状態という意味から静態的と見なされ、通時態は歴史的な変化の直中にあるという意味から動態的と見なされる。しかし、固定性の側から見ると、この静態と動態の関係は逆転する。つまり、現時点で活動している言語という意味での共時態は動態的で、現時点に残された変化の全ての痕跡という意味での通時態は静態的である。活動体としての言語は、現時点の活動状態を純化するために、過去からの痕跡を分離するのであるが、そのような手続きの裏側には、固定性としての文字が現時点の停止状態を純化するために言語の活動状態を分離するという行程が伴われている。固定性にとって、言語の活動状態の分離とは、すなわち活動体の停止を意味する。活動体の停止は単なる中断ではない。活動体はそれ自身が整合性を持って分離することを強いられて

いるので、それは活動体の自足的な消滅と見なさねばならない。かくして、固定性に対する活動体の消滅は、固定性としての文字と活動体としての言語を全体として関係づけるときの原理であることがわかる。

### 2.3 言語の基本要素と文字

共時態の中に位置付けられた純粹な活動体としての言語における単位とはいかなるものかということについて、ソシュールは、まず、能記 (signifiant) と所記 (signifié) との結合という構造を提示する。能記とは、聴覚印象 (image acoustique) のことで、聞き取られた音の印象を表し、所記とは、概念 (concept) のことで、聞き取られた意味の印象を表す。これらは、どちらか一方だけで成立するような実体性を持たず、ただ、言語記号の二面性としてだけ問題となる<sup>12)</sup>。

「言語実在体 (entité linguistique) は、能記と所記との連合 (association) によらなくては存在しない。これらの要素の一しか引き止めないときは、それは消え失せる。眼前にあるものはもはや具体的対象ではなくて、純粹の抽象物に過ぎない。実在体を丸ごと掴んだと思いがら、実はいつもその一部しか掴まない恐れがある。このことは、例えば言連鎖を音節に区分したとすれば起こったであろう。音節は音声学以外では価値を持たない。一続きの音は、それが観念の支えとならない限り、言語的なものではない。それ自体としてみれば、生理学的研究の資料に過ぎないのである。所記にしても、これを能記から切り離してしまえば、同然である。家、白い、見るなどといった概念は、それとして見れば、心理学に属する。それらは聴覚映像との連合によらなくては、言語実在体とはならない」<sup>13)</sup>

この言語記号についての考察は、言語の単位が概念的な意味の単位としての語 (mot) に相当するかのように説明されているが、ここでは、むしろ本来連続的で不分明な音連鎖の不連続な分節に関する巨視的な理論上の仕組みが提示されているのである。そして、直ちにこのような意味と音との結合のような分節を特定することが、實際上困難であることが示される。この分節は語でもないしその下位区分でもないし文でも言述 (discours) でもない<sup>(脚注10)</sup>。これら

(10) 「これはかなり普及した学説であるが、唯一の具体的単位は文であると主張し、我々は文によってのみ語り、語は後でそれから引き出したものだという。だがまず、文はどの程度言語に属するのであるか。もしそれが言 (parole) のなわばりのものであるならば、言語単位として通用するわけには行かない。仮にこの難関を突破し得たとしよう。さて、我々の口にすることのできる文の総体を想像してみると、その最も目につく特質は、それらの間に寸分の似寄りもないことである。人はともすれば文の無限の多様性を、動物種を組み立てる固体のそれに劣らぬ多様に擬したがる。しかしそれは妄想である。種を同じくする動物にあっては、共通の特質のほうが、彼らを引き離す差異よりもはるかに重要である。これに反して、文の間で優勢なのは多様性であって、この多様性を通じて全ての文を結ぶものを求めるや、求めずして文法的諸特質を具えた語に出会うのだ。かくして同じ難関に舞い戻る」<sup>14)</sup>



のあらかじめ与えられているような区分は、実際には能記と所記の結合という構造による区切りの単位にすら当てはまらない。共時論的同一性と共時論的実在は、実体的な単位の定立に反し、単位をそれ自体ではなく、それ以外のものとの対比によってのみ成立させる。それによって、ソシュールは、単位という実体的な問題を、価値という相対的關係性の問題へと向かわせる。価値はそれ自身でなにか積極的な辞項を持たず、他のものとの連帯的な同時性において生じるものであるため、意味 (signification) とは異なる。意味は聴覚印象の反面として現れるが、価値はそれと同時に他の記号の反面としても現れる。価値は、似ていないものとの交換と似ているものとの比較という二重の關係によって成立する。このような言語的価値の考察から、活動体としての言語の基本的な構造が浮かび上がってくる。言語は、音声の自然法則や意味の有機的統一などとは關係なく、純粹に活動内的な關係によって成立している。その關係とは、音素や語といったような単位の積極的な辞項相互が後から持つ關係ではなく、辞項そのものがそこから派生するような差異という關係である。ソシュールは、言語の単位の考察において、最終的に、言語には積極的な辞項を持たない差異だけしかないと結論づける。

「差異といえば、一般に積極的辞項を予想し、それらの中に成立するものであるが、言語には積極的辞項のない差異しかない。所記をとってみても能記をとってみても、言語が含むのは、言語体系に先立って存在するような觀念でも音でもなくて、ただこの体系から生じる概念的 (所記的) 差異と音的 (能記的) 差異とだけである」<sup>15)</sup> 「言語体系は、音の一連の差異が觀念の一連の差異と結合したものである。しかしある数の聴覚記号と、思想の塊に同数の分断を施したものとを照らし合わすときは、価値体系が産み出される。各記号の内部において、音的要素と心的要素との間に実行のある連結を付けるものは、この体系である。所記であれ能記であれ、別々では純粹に差異的であり消極的であるが、それらの結合は積極的事実である。この種の事実こそ言語が含む唯一のものでさえある。なぜなら言語制度の特性は、正にこれら二つの秩序の差異の間に並行を保つことなのであるから」<sup>16)</sup>

積極的辞項のない差異と差異との結合から、価値体系の積極的事実が成立するというこの結論は、言語だけではない活動体一般の側から活動体の単位を考察する場合の結論でもある。この二つの差異の結合という仮説は、抽象的な構造としてははっきりしているが、具体的な事実としては、語のような巨視的で曖昧な単位にしかあてはめられておらず、しかもそれは説明のための便宜的な例示と見なされている<sup>(脚注11)</sup>。しかし、この差異という問題が持つ重要性は、

(11) 「言語の具体的実在体すなわち単位は、直接捉えるわけにはいかないで、我々は語を抜おうと思う。これは、言語単位の定義と精密に符合するものではないが、すくなくともそれについての近似的觀念をあたえ、具体的であるという利益がある。それゆえ我々はそれを共時論的体系の現実的辞項と等価な標本と見なすことにする。そして語について引き出された原理は、実在体一般にも妥当するであろう」<sup>17)</sup>

その抽象性にこそ存在する。二つの差異の結合が積極的な事実であるという構造はただちには理解し難いが、これはその事実がそのままの形では具体化されないことによる。これは、言語の運用の中で、言連鎖の記号と記号との対立の中に位置づけられた横方向の差異としての連辞関係 (rapport syntagme) と、言連鎖の中の記号がそれに比較される他の記号との対立の中に位置づけられた縦方向の差異としての連合関係 (rapport associatif) という、二つの差異の結合として理解される時に初めて具体的な構造として提示される。能記と所記との結合が積極的な事実ならば、能記と所記との結合は、その結合同士の結合と同じ場面にある関係と考えた方がよい。それにより、能記的差異と所記的差異という二つの差異もまた連辞関係と連合関係の中に分配され得る。それと同時に、連辞関係と連合関係は、それ自身、巨大な言連鎖の二重分節と考えることもできる。しかし、連辞関係と連合関係との結合は、あくまでも言連鎖の具体化の場面に関わった言語的事象である。したがって最終的にここで抽出された言語の基本構造は、二つの差異の重合という場面と考えるべきであろう。

活動体の基本構造は、このようにして消極的な差異に支えられている。これに対して、固定性の基本構造は、とりあえず消極的な同一性に支えられていると言える。固定性としての文字の中に単位を特定することは、言語とは異なり極めて簡単である。固定性は、活動体の任意性を完全に許容する。文字は言語を選ばないし、どのような読み取りも、どのような切り取りや結合も拒絶することはない。文字は言語に対して幾らでも扱いやすい同一性を提供する。それによって、言語学は専ら文字を使って言語の法則を記述する。だからといって、決してそのために文字はその積極的な構造を言語に受け渡すことはない。言語学は、言語を説明する時も文字を説明する時も同様に文字を使用するが、文字はそこでは文字の基本構造を発現させるものとして扱われることもなく、言語の説明のための、注意深く言語との混同を避けるべき便宜的な書き込みとして、その表面で自足している限り、文字の基本構造を表すことはない。このようにして、文字から再び引き出された同一性は直ちに無効になる。これが言語から見た文字の姿である<sup>(脚注12)</sup>。つまり、固定性としての文字には消極的な同一性しかない。そしてこれが、言語的な差異の原理に対応する文字の原理である。しかしこのことは、同時に固定性の前での活動体の消去にも照応する。活動体とは、固定性としての文字にとって、言語的同一性の無効

(12) 粒子状の単位と見なされた文字、文字の結合体としての語、語の結合体としての文、文の結合体としての言述、言述の結合体としての書物、書物の結合体としての蔵書や図書館などは、比較的分かりやすい例だが、それらは書き込まれると同時に解体するし、読み取られると同時に解体する。ここには、各々の間にもっと遙かに複雑な仕組みが挟み込まれており、それらは全て消極的な同一性に支えられている。例えば、文字連鎖の進む方向、文字の裏表、文字連鎖の折り返しと折り畳み、下線、書体、文字の大きさや色、見せ消ち、パランプセスト (palimpseste)、ルビ、頁割付、ノンブル、目次、索引など。これらはほんの僅かな例でしかない。

化であり、すなわち固定性の上でのそれ自身の活動の自足的消去である。これは、固定性を対象とした、連辭的消去と連合的消去とのせめぎ合いを意味する(脚注<sup>13</sup>)。

## 2.4 言語の弁別的素領域

言語における差異の二重化という仮説は、連辭と連合という二つの方向の交差という形で、消極的あるいは否定的な弁別がしっかりとした構造を持ち得ることを示している。これは、差異的な指標のみで成り立つ価値の体系である言語の基本的な原理であるが、そのことは、この仮説に関わる具体的な事実が、更に微視的な単位として提示されたことによって強化されると同時に限定された。連辭的差異と連合的差異が特定の一点を局所的に指し示すような純粹に連鎖的かつ継起的な場は、事実上音連鎖しかない。二重の差異という仮説から逆に類推していけば、言語的構造は、極限的には音声言語の中にしかあり得ないことが結論づけられる。純粹で空虚な差異的記号は、音声言語の最小単位である音素しかない。このような考えは、音韻的な弁別単位を特定することを通して、ロマン・ヤコブソン (Jakobson, Roman) によって提示された。ヤコブソンは、音声言語の基本単位としての音素 (phoneme) の特異性を強調し(脚注<sup>14</sup>)、それを継起性の軸と同時性の軸との交叉という条件においてのみ還元不可能な単位と位置づける。継起性と同時性の二軸にはそれぞれ複数の弁別要素の対立が重なり合い、消極的な差異が複合的に表す音韻的性質が音素であるとする。これによって音素という単位は複数の基本的な弁別の要素である弁別特性 (distinctive feature) の同時的な群化として定義づけられる。

「弁別特性は、音素と呼ばれる同時的な束に集括される。音素は連鎖されて序列になる。音素のあらゆる群化の規定にある基本的パターンは音節 (syllable) である。音節の音素的構造は、一組の規則によって決定され、いかなる序列もこの構造モデルの規則的な反復に基づく。自由形式 (free form) は、整数の音節を含んでいなければならない。音素の数が音節数の小約

(13) 連辭と連合は、固定性としての文字の上では、線状性を巡る二つの方向、すなわちその場での端的な自足的消去と迂回的で構築的な自足的消去とのせめぎ合いの場を作り出す。このせめぎ合いは、文字通りの文字を別の文字に受け渡す巨視的な交換の場へと行き着く。このせめぎ合いについては、次回詳しく論ずることとする。

(14) 「ただ音素だけが、純粹で空虚な示差的記号なのである。音素の唯一の言語内容、あるいはもっと広く言えば、その唯一の記号学的内容は、特定の体系の他の音素全てに対する非相似性である。ある音素は、同じ位置にある他の音素とは、別のものを意味する。これがその音素の唯一の価値である」<sup>10)</sup> 「こうして、固有の意味での言語は、その構成原理そのものによって、他の記号体系から区別される。言語は、有意的であると同時に表意作用を欠く要素で構成された唯一の体系である。従って、音素こそ、言語の特定の要素なのである。哲学的用語法は、様々な記号体系を言語と見なし、固有の意味での言語を語の言語と見なす傾向がある。これを音素の言語として示すことにすれば、恐らく、もっとずっと明確に特定化できよう。この音素の言語こそ、様々な記号体系の中で最も重要なものであり、我々にとっては、なにかんづく言語であり、固有の意味での言語であり、端的に言語であって音素の言語のこの特権的な地位は、まさしくその成分の特殊な性格、有意的であると同時にあらゆる表意作用を欠く要素の二律背反的な性格に基づいているのではないかと問うてみる事ができよう」<sup>11)</sup>

数であり、弁別特性の数が音素数の約数であるのと同様に、一言語の音節の数は明らかに、自由形式の数の小約数である」<sup>20)</sup>「弁別特性は二つの類に分けられる。韻律的特性 (prosodic feature) と本有的特性 (inherent feature) である。韻律的特性は、音節の頭頂 (crest) を形成する音素によってのみ提示され、音節あるいは音節連鎖の際立ちに関連してのみ定義され得る。他方、本有的特性は音節の際立ちにおける役割には無関係に音素によって提示され、この種の特性の定義は音節あるいは音節連鎖の際立ちに関連性を持たない」<sup>21)</sup>

弁別特性の音素への同時的累合は、弁別特性の各々の性質に応じて行われる。時間において継起的に現れる韻律的特性は、音節の頭頂音素すなわち音節内の母音において現れ、そこには音調 (tone)、強度 (force)、音量 (quantity) という三つの型が含まれる。韻律的特性に関しては、音調特性が高音域と低音域、強度特性が強勢と無強勢、音量特性が長と短の対立に該当する。時間において瞬間的同時に現れる本有的特性は、音節あるいは音節連鎖の際立ちには関連性を持たず、音素によって提示され、それは共鳴性 (sonority)、延引性 (protensity)、音調性 (tonality) という三つの種類に分けられる。本有的特性に関しては、共鳴性特性が、母音的と非母音的、子音的と非子音的、鼻音的と口音的、集約的と拡散的、急激的と連続的、粗擦的と非粗擦的、抑止的と非抑止的、有声と無声の対立を含み、延引性特性が、張り弛みの対立を含み、音調性特性が、低音調と高音調、変音調と非変音調、嬰音調と非嬰音調の対立を含む。これらの二項対立から各言語によって使用される弁別特性が選択され、それによって限られた数の音素ができあがる。これらの弁別特性は、それ自身は音声的性質によって定立された単位ではなく、二項対立そのものであり、これらは例外なく二者択一として使用される。

「韻律的特性は二つの座標を持つ。一方において、高音域と低音域、上昇ピッチと下降ピッチ、あるいは長と短といった両極項は全て、他の条件が等しければ、序列の同じ位置に現れ得て、したがって、二つの交替形のいずれかを話し手は選択して用い、聞き手は選択して把握し、選んだ選択項を拒否した選択項との関係によって同定する。これら二つの交替形は、メッセージの所与の単位中に一方は存在し他方は不在であって、正真正銘の論理的対立を構成する。他方において、両極項はその両方が与えられた序列の中に共存する時のみ完全に認知可能となり、話し手はその対比を実行し、聞き手はこれを知覚する。このように、韻律的特性の両辞項は、一つの対立の二つの項としてコードの中で共存し、その上にメッセージの中で共起して対比を産み出す。もしもメッセージが短すぎて対比する単位の双方を共に含まないならば、特性は序列によって提供される代行手がかりから推測されうる。たとえば、単音節のメッセージにおける母音の量は、周囲の子音の相対的な持続から推測され、単音素のメッセージの音域は、母音の声立ておよび/または衰滅における変調の延びから推測されるであろう。

本有的特性の認定と限定は、一序列の中で同じ位置に許容される二つの選択項の間の選択に

のみ基づく。一つの脈絡の中に共起する二極項の比較は含まれない。したがって、本有的特性の二つの選択項は、一つの対立の二項としてコードのうちに共存するが、同じメッセージのなかで対比的並列を要求しない。本有的特性は所与の位置に存在している選択項と不在の選択項との比較を通じてのみ同定されるゆえに、一つの所与の位置における或る本有的特性の具現は、韻律的特性の具現より変異を許すことが少ない。』<sup>22)</sup>

弁別特性の二者択一的性質は、情報の経済原則に符合するものとしても、解釈されている。消極的差異を二項対立へと特定するならば、できる限りその対立の数を減らさなければならない(脚注15)。音韻的対立の中で実際に関与的な要素を特定し検証することも重要であるが、二項対立の数量的な関数化は、その場合に最も理想的な仮説として現れてくる。二者択一は、最小の数の離散的選択肢の選択であり、そのことが通信理論における比較的単純な離散的情報の数学的な記述に一致すると、ヤコブソンは考えている。

「口頭の発話の流れは、物理的に連続であって、文字による発話によって表されたような不連続な成分の有限の集まりの場合よりも、通信の数学的理論をして最初にはるかにこみ入った状況に当面させた。しかし言語分析は、口頭の発話を有限個の基本的な情報単位に分解するに至った。これらの究極の離散的単位、いわゆる弁別特性は音素と呼ばれる同時的な束にまとめられ、更に、音素は連鎖されて序列をなす。このように、言語における形式は明らかに粒状の構造を持っており、量的な記述を施され得るものである」<sup>24)</sup>「言語における弁別特性の全体系の根底にある二分法の原理は、言語学によって次第に明らかにされ、通信工学者によって測定単位として用いられている二進数字のうちに確証を得たのである。メッセージの選択的情報とは、受信者がメッセージから引き出さねばならないものを、既に所有しているデータを基礎として再構成することを受信者に可能ならしめる二項選択の最小数である、と通信工学者が定義するとき、この現実的な定式化は、言葉の伝達における弁別特性の役割にも完全に適用可能である」<sup>25)</sup>

ヤコブソンは、言語が原理的に依拠する消極的差異を、普遍的な二者択一の関数化に裏付けられたものにしようとした。ヤコブソンの導き出した弁別特性の構造記述は、純粹価値の体系である言語の中であって最も小さいが故に最も強力な単位を提示した。これによって、音韻の弁別構造の微視的な部分への有力な手がかりが与えられた。ある意味ではここから直ちに、活

(15) 「音序列に含まれている音素的情報を最小数の選択項に削減することによって、我々は最も経済的な、したがって最適の解決を見出すのである。それは全メッセージを符号化したり複合化したりするのに十分な、最も簡単な操作の最小数である。ある言語をその究極の構成要素に分析する際に、我々はこの言語に組み入れられているメッセージにおける、それぞれの音素の同定を許す弁別的対立の最小の集合を探す。この作業は弁別特性を、共起ないしは隣接する余剰的特性から区別することを要求する」<sup>23)</sup>

動体としての言語の基礎的な単位の性質を検討することもできる。二項対立は、同時的な累合によって、音素の中でその選択を果たす。韻律的特性であれ、本有的特性であれ、弁別特性は音素の中に実際に存在するものと実際には存在しないものとの対立を仮定している。この対立は、選択された一方の弁別特性を調べることで検証可能である。それ故、これは単なる精神主義的な仮構ではない。しかし、音連鎖の中に特定の位置を持った音素において選択肢の一方しか残されていないということは、音素の中には、言語にはそれだけしか実在していないはずの対立が、もはや存在しないということになる。弁別特性の段階では存在している対立が、音素の段階では存在していない。これは、必ずしも言語運用論的な場面における発話内容の中で決定された音素の問題とは言えない。なぜなら、音素は、運用上ではなく、言語体系の構造上の単位として定義されているからである。音素は継起的にも同時的にも広がりを持つというヤコブソンの提言は、既にその時点で、純粋な差異の体系としての言語、すなわち純粋な活動体としての言語が、音素の内部では原理的に解消していることを示す。このことから、弁別的な二項対立と音素的領域の实在は二律背反であることがわかる。この両者を共存させるためには、音素的単位がとりあえず弁別機能を保留されていると考える他はない。音素とは、ヤコブソンにとっては、量子力学が確率論を空間確定に利用するのと同じ様な数学的操作を行うもの、すなわち確率論的な決定の場を不確定的に囲い込んだ素領域なのである。従って素領域の内部構造は確定できず存在もしていない。弁別的な機能は、結局、より微視的でない関係へと受け渡されることになる。このようにして、単位そのものが解消されるというのが、単位と機能の原理的な関係である。否定性がそのままの形で言語を成立させているのかという問題は、まだ答えが出ているわけではない。なぜなら、この問題はより大きな単位と機能の関係へと順次受け渡されるからである。

## 2.5 言語の機能的二重化

活動体としての言語における音素という単位を、ヤコブソンの二者択一的な還元論的機能主義に比べると比較的緩やかな形で定義するやり方が、アンドレ・マルティネ (Martinet, Andre) やレオナルド・ブルームフィールド (Bloomfield, Leonard) などによって示されている。マルティネにおいては、弁別特性は、いかなる数の可能性の間の選択でもあり得る。また、各言語は、あらかじめ決められた弁別特性の中から関与的な特性を選び出すのではなく、各々が固有の弁別特性を使用する。そして、その弁別特性は、体系内の具体的な単位の間にある連関に基づいて抽出される。すなわち、弁別特性はあくまでも、体系内の音素などの単位間の関係によって定義されることになる。このような定義によれば、単位間の連帯関係や不均衡が明確になると同時に、言語の進化の方向を示すこともできる。

「言語事実を量的なデータに還元することには著しい利点がある。しかし、問題になっている単位の質が、進化を条件づける際の本質的な一つの要素であることを忘れてはならないだろう」<sup>26)</sup>「言語進化の方向を理解するには、ある言表のそれぞれの単位は、弁別単位であれ表意単位であれ、音素であれ記号素であれ、その音としての実現または意味内容が二重の圧力を受けていることを忘れてはならない。一方では、発話連鎖の中で隣り合うものから圧力を受け、もう一方では、一緒に体系を作っている単位から圧力を受ける。後者の単位とは、同じ場所に姿を見せ得たはずでありながら、言いたかったことを言うためにしりぞけなければならなかった単位である。これらの圧力は、ある場合には音の上のものであり、他の場合には意味の上のものであるが、類似した図式に従っておのずと秩序づけられる」<sup>27)</sup>

音素を、体系内での様々な圧力の均衡によって成立する単位と見なすマルティネの方法は、ヤコブソンのように数の限られた弁別特性の群化から音素を構築していくような音素の定義と異なり、音連鎖の分節の二重構造の記述に基づいて提示される。二重分節は、一つの意味と一つの音形を示す単位への分節、すなわち第一次分節と、一つの音素への分節、すなわち第二次分節との重なりとして示されている。マルティネは、その二重分節という基本構造の中に言語的な差異の中立化を認めようとする。これによって、特定の言語の単位の記述には、分節の相互の対立において示唆的な特性を制限することができ、各言語の単位の範列表は明確なものになる。

「言語とは通信の道具で、それによって人間の経験が、意味内容と音表現とを具えた単位、すなわち記号素に、共同体ごとに違うやり方で、おのずから分析されるものである。この音表現が今度は弁別かつ継起的な単位、すなわち音素に分節され、音素は言語ごとに数が一定していて、その性質と相互連関も一つの言語ともう一つの言語では違う。このことは次の二つの意味を含む。第一に、我々は言語という用語をもっぱら、二重に分節され、声で表す通信の道具を指すのにあてる。第二に、このように土台が共通である点を除いては、上の公式化に含まれた違うという用語が示す通り、どんなものであろうと元々言語に属するもので、一つの言語ともう一つの言語で違い得ないものはない」<sup>28)</sup>「言語活動の第一次分節 (la premiere articulation) とは、およそ伝えるべきどんな経験の事実でも、他人に知らせたいと思うどんな要求でも、一つの声形と一つの意味とをそれぞれ具えた一連の単位に分析される際に従う分節である」<sup>29)</sup>「第一次分節が与えてくれる単位は、それぞれ所記と能記とを持っていて、記号であり、しかもその中のどれをとっても記号の継起に分析しかねるから、最小記号である。これらの単位を指すのに広く認められた用語はない。ここでは記号素 (moneme) という用語を使うことにする。どんな記号とも同じように、記号素は二つの面を具えた単位であり、一つは所記面、すなわち意味あるいは価値、もう一つは音形の下にそれを表す能記面で、これは第二次分節の

単位で合成されている。後者の単位が音素（phoneme）と名付けられている」<sup>30)</sup>

言語的差異を、体系内の相互の関連性に位置づけようとするれば、音素という単位を機能的に確定できる。だがその機能は、第一次分節の外へと直接出て行くものではない。二重分節という構造の閉鎖性こそが、マルティネにとっては言語の経済性を示すものとなっている<sup>(脚注16)</sup>。少数の限られた数の弁別的音素による組み合わせが、開かれてはいるが有限な数の第一次分節を作り出す。第二次分節の弁別機能は、第一次分節にまとめられ一つになる。第一次分節はこの構造を通してそれ自身一つの弁別機能を持つ。この構造は、ヤコブソンにおける弁別特性と音素の関係を、より微視的でない場に移行させたものと見なすことができる。ヤコブソンにおいては強力ではあるが理想的でもある仮説が、マルティネにおいては中立的ではあるがより現実的な場に置き換えられている。ただ、単位と機能の二律背反というこの構造の特質は、実際には変わったわけではない。二重分節は、第一次分節と第二次分節との二律背反であり、一方の決定を消去しなければ他方の決定は得られない。一次分節が連続した切片として成立しているときには二次分節は存在しないし、二次分節が存在しているときには一次分節は既に分解して弁別不能となり、したがって存在しない。この両者が共存できる場合は、少なくとも純粋な言語の中には実在し得ない。第二次分節は、弁別機能を単位の実在性が消去されることによってその場で純化することはなく、第一次分節の実在性においてのみその機能を実現する。第一次分節はそれ自身が弁別機能をまとめ上げて一つの弁別機能になる以上は再び第二次分節の実在性を参照することはない。第一次分節は、マルティネにおいて、とりあえず所記と能記の結合による構造体として、その機能を保留された単位を形成している。この理論上の保留は、記号素の選択的な体系に制限を受ける。すなわち、第一次分節は第二次分節の実在性を消去して単独の単位となるが、それによって更に大きな弁別機能への受け渡しへ向かって待機していることになる。これは、活動体としての言語が、活動の内部構造を消去しながら、段階的に大きな単位の保留へと進んでいくことを表している。ここには、単なる言語記述的な外的な手段としてではない原理的な固定性の介在がある。単位の確定における理論上の保留とは、活動体そのものの内的な関わり合いにおける固定性である。活動体が向かっているのは、実際にはこの保留そのものである。しかも、活動体は、固定性の外的な消去ではなく、活動体自身の内的な消去によって理論上の保留へと常に受け渡されることで、消極的に固定性と関わっている。そし

(16) 「二段がまえの分節の結果経済性が得られるからこそ、使い道が広くて、あれほど安あがり情報であれほどたくさん伝える力のある通信用具を手に入れることも許される。経済性を補足してあらわすばかりでなく、第二次分節は、能記の形を対応する所記の本性に依存しないものにし、このようにして言語形にいつそう大きな安定性を保証する利点がある」<sup>31)</sup>



て、このような活動体の中から派生した固定性である文字は、活動体の理論上の保留が持つ任意性を全面的に受け入れたものであることがわかるのである。これによって固定性は活動体から消極的な単位を一方的に書き込まれることになる。しかしながら、それは、活動体の消去を前提にしてのことであり、つまりここでは、活動体としての言語とは、その消去の総体のことである。

## 2.6 言語の経験的消去

ヤコブソンやマルティネにおいては、音素という単位は、差異の二重構造の仮説によって理論的に構築可能なものと見なされたが、経験論的な行動主義者であるブルームフィールドにおいては、音素は、経験的に修得されることによって音声の中で識別可能となる、示唆的な性質を持った音の切片の同一性と見なされる。

「任意の発話における、実験室で記録され得るであろうような、音の諸特徴は、この発話の総音響特性 (gross acoustic features) である。この総音響特性のうち、一部は無意的である、すなわち非弁別的 (non-distinctive) であり、ただ一部だけが意味と結びつけられておりコミュニケーションにとり必須である、すなわち弁別的 (distinctive) である。非弁別的音特性と弁別的音特性の差異は挙げて話手の習慣中にある。ある言語では弁別的である特性が、別の言語では非弁別的であるかも知れないのである。発話の弁別特性 (distinctive feature) はその意味を知って始めて認知できるものである以上、それは純音声学 (pure phonetics) の段階では見極めることができない」<sup>32)</sup> 「ある一言語の弁別特性を認知するためには、我々は純音声学の立場を捨て、あたかも科学が、ことば形式の意味を作り上げているすべての場面とすべての応答とを見極め得るに足るほど進歩を遂げたかのごとくに振る舞わなければならない。我々自身の言語の場合には、我々はあることば形式が同一か異なるかを教えるのは日常の経験に任せている」<sup>33)</sup> 「適当量の実験を行えば、ことば形式の優位的諸特徴は数に限りがあることがわかるであろう。この点、有意的諸特性は総音響特性 (これは連続的総体をなし、望むだけの数の部分にさらに分けうる) と対象をなす。我々自身の言語における形式の弁別特性を認知するためには、音のどの特徴がコミュニケーションの目的にとり異なっているかを決定しさえすればよい」<sup>34)</sup> 「任意の発話の総音響特性のうちで、一定数のものは弁別的であり、継起的発話において、認知しうる、相対的に恒常的のかたちを取って繰り返し現れるのである。これらの弁別特性は塊 (lumps) となって、あるいは束 (bundles) となって現れ、その各々を我々は音素と呼ぶ。話手は音素特性 (phoneme-features) が音波の中に存在するように発音運動を行うように訓練されている。また、これらの特性に対してのみ応答し、彼の耳に達する総音響特性の残り

の部分が無視するよう訓練を受けている」<sup>35)</sup>(脚注17)

ブルームフィールドの定義においては、弁別特性や非弁別特性が差異として言語の中にあるのではない。非弁別特性は言語外的な総音響特性の内にあり、弁別特性は相対的な恒常形として言語を成り立たせる。弁別的な機能は、そこでは、音素の分類にあたっての便宜上の役割しか果たさない。ブルームフィールドにとっては、言語的な差異とはあくまでも意味の差異であるが、言語の有意味形式は音素の排列であって、その段階では既に言語的差異は処理済みと見なされる。これは、言語構造の全てに渡って差異が言語を純粹価値の体系として成り立たせているという消極的全体論を巧みに逃れているようにも見えるが、言語そのものに関する理論の不在あるいは理論の偏在的な消去を表してもいる。弁別的機能は、ここでは言語内的に弱体化させられているのであるが、逆に、言語外的な事実と言語内的な事実とを分離する機能としては強化されている。これは、言語に関する経験論的あるいは実証主義的な理論の特徴を示しているのだが、物質的音響の連続性からなぜ言語的な音響切片の選択的利用が成立するかはわからないにしても、訓練された言語的な知覚から、その背景としての物質的音響の連続性を消去する手続きだけは、言語の性質として浮かび上がってくる。このことは、活動体が本質的に固定性の前での自足的自己消失ではないとしても、活動体からの活動体外部を消去する働きかけではあることを示す。この働きかけは、緩やかな同一性としての経験的音切片が単位として現れてくる場合にもその単位に対して作用する。あるいは、むしろ、消去の対象としてだけ単位が定義されるということになるのであり、その意味では自足的消去の先取りであると言える。そこから段階毎に残留する大量の経験的切片は、まさに固定性に受け渡される消極的同一性そのものである。固定性としての文字の単位とは、このようにして派生するものであるだろう。

### 3. 文字の単位と継起性

#### 3.1 言語の継起性と文字

音素は、活動体としての言語が持つ、自足的自己消失と固定性の消去という二つの消滅の焦点として現れてくる。このことは、固定性としての文字の単位を特定しようとする際に、強力な強制力を持つ。固定性はまず第一に言語内的に構成されたものとして現れる。言語内的な構成とは、常に理論上の保留である。それ故、固定性としての文字は、任意の理論上の保留によ

---

(17) 弁別特性 (distinctive feature) は、邦訳では示差的特徴となっているがヤコブソンの邦訳に合わせて弁別特性とする。その他の異同は、示差的→弁別的 (distinctive)、特徴→特性 (feature)、非示差的特徴→非弁別特性 (non-distinctive feature)。

って、場当たりのにその単位を書き込まれることになる<sup>(脚注18)</sup>。通常理解されている文字の単位とは、このような任意性によって想定されたものにすぎない。任意性は、勿論音素の分節に並行するよう見えるまがいものに結びつくこともあれば、意味的な分節からくる場合もある<sup>(脚注19)</sup>。意味的な分節も様々な段階があり、象徴的な指標のようなものに結びつくこともある。ただ、音素的か意味的かというような区別は、実際には固定性の側からの意図しない区別であるとも言える。つまり、音素、音節、意味、等々といった区分は固定性を前にした活動体の分析と固定性へ託されたその保留に過ぎないということだ。そもそも、段階的な分節が、実際に単位の大小関係なのかは、それほどはっきりしているわけではない。意味作用を可能にする、より小さな音素的分節という構造は、大小関係に関する限り、完全な虚構である。この虚構を可能にすると同時に、この虚構の限界をも規定しているのは、活動体外的であれ活動体内的であれ固定性なのである。これは、文字体系なるものが実在するのかという問題であるが、この問題が困難であるのは、文字が固定性内部で構築されたものではなく、活動体内部で構築されたものでもなく、活動体の活動体内部での消滅によって常に成立した残存物であるからだ。ソシュールが言うように言語は相対的に恣意的であるが、文字は絶対的に恣意的である。文字は、言語よりも遙かに歴史的かつ政治的な条件に従属している。文字の歴史は便宜的な流用と、政治的な強制の不均衡なばらまきに満ちている。文字は、言語のように慣習的な均衡を保つようなものではない。活動体としての内的均衡を通して自足的な消滅を果たす言語に対して、固定性として残留する文字は、基本的に機能的均衡が破れた状態にある。そのような観点から、音素と文字との関わり合いを見てみれば、その異常さがよくわかるのである。

文字は一文字一文字が音素を表すべきだという強制的な圧力がある。これは純粋に政治的な圧力でしかなく、別に間違っているわけではない。これは権利上の問題ではなく、事実上の問題である。実際に固定性としての文字は、常にこのような圧力にさらされている。この種の圧力は他にも様々にあり、互いに矛盾しあっているが、それらの圧力がなければ文字は成立しなかったともいえる。例えば、文字は音素ではなく音節を表すべきだという圧力があり、この場

(18) 必ずしも全ての段階で単位が書き込まれるわけではない。また、理論上の保留は当然の事ながら言語毎に異なる。標記の歴史的条件によっても変わってくる。しかし、文字がセム文字系統と漢字系統の二つの系統しか生き残っていない現状では、その違いは微妙であって見極め難い。古代文字を参照することもできるが、その場合は新たに復元された読み取りに関してしか考えることができない。ただ、文字の正書法は時代によってかなり慣習上あるいは制度上の断層があり、その部分を参考にすることもできる。例えば、語の表記上の区切り、すなわち連結、空白、切断記号など。行の方向や折り返し、すなわち右向き、左向き、縦横、ブストロフェドン、左右対称など。文書の表面、すなわち辞書、リスト、文学などの形の上での差異。文書の形態、すなわち平らな粘土板、柱状の粘土、巻物状、コデックスなど。これらの具体的な形は、別に詳しく論ずる必要のある事柄である。

(19) いわゆる表音文字、表意文字という、文字の言語的性質に基づいているかのような、固定性の任意の切り取りあるいは書き込みである。

合は修得の利便性から最も合理性を持った圧力となっている<sup>(脚注20)</sup>。また、言語の違いを越えた普通言語として、文字が意味を表すべきだという圧力もある<sup>(脚注21)</sup>。また、文字は、音素を線上にではなく、二次元の面上に組み合わせて音節の区切りを同時に示すべきだという圧力もある<sup>(脚注22)</sup>。これらは、各々が全て、言語学的に見ても合理性を持った主張と見なせるが、各々が言語学的な合理性そのものを互いに逆転させるような部分も含んでいる。それは特に単位階層の序列の問題に関して起こる。音素論自体の内部にもそのような問題があることは既に見てきた通りである<sup>(脚注23)</sup>。また、これらの主張には共通する部分もあり、それは文字の線状性を言語の文脈的な継起性と同一視するという前提である。言語の文脈的な継起性の内部では、場合によって単位の序列が逆転する。しかし、継起性そのものは、文字の線状性および連鎖性と普遍的に一致するものと判断されている。これは、言語の文脈的な継起性そのものが、固定性を前にした、規模を拡張した理論上の保留に基づいているからなのだ。言語の文脈的な継起性とは、固定性への消極的な依存であり、活動体としての言語は文脈的にも固定性の前の自足的消滅を目指す。活動体としての言語の自足的消滅への圧力が、固定性としての文字を線状性へと構築させると同時に、その線状性が改めて言語を文脈において継起的なものに見せ掛ける。そして、更にその継起性と見なされた文字連鎖の粒子状の領域の一つ一つを、合理的な素領域へと強化することにもなる。そして、線状に延びる文字の疑似連続性と、疑似連鎖的に分かれる文字の点的無領域性との亀裂の向こう側に、活動体としての言語の自足的消滅が保留されているのである。

とりわけ文字の音素論的な主張の中では、言語の文脈的な継起性の認識が言語の客観的実在性と言語の時間的継起性との混同を含んでいる。まず第一に音素が音声的客観性から離れた単位であるならば、音素は時間的な継起性からも離れているはずである。音素は、さらに上位の

- 
- (20) 日本の仮名は、非常に良くできた音節文字だと言われているが、それでも音声表記上の不一致はある。かつては、しょうせふ、ちょうてふ、おもいおもひ、なおなほ、などがあり、今でも、わーは、えーへ、が残っている。また、全ての音声表記文字は音節文字と見なすこともできる。
- (21) 十七世紀のヨーロッパでは、古代エジプトのヒエログリフと漢字が、実際に普通言語の模範として参照されたことがある。ただし、前者は表意文字としての解説が徒労に終わっていたし、後者がそれほど構造的に意味をうまく表しているわけではないことも気付かれていた。しかし、普通文字言語の発想は、唯一ライプニッツにおいて実を結び、今日の数学的記号の基礎が築かれた。数学的記号は、歴史的にも構造的にも表意文字としての漢字の普遍性という模範像から生まれたわけである。<sup>36)37)38)</sup>
- (22) 韓国のハングル文字は、文字の構築の仕組みが合理的であると言われている。この文字は音素標記と音節表記をうまく両立させている。ここでは音素標記が継起性を逃れて音節の弁別にだけ関わっているのである。しかし、文字の機能としてはそのような内部構造は存在する必要が無く、却ってその完全性の主張は文字を線的に処理する場合に障害となる。この障害は固定性の抵抗を表すのではなく、不必要な近似的合理性に基づいた活動体の牽引的圧力を表す。
- (23) 単位階層の序列の問題は、主に時間的な長短によって規定される。ヤコブソンが音素をより少数の弁別特性の束として定義しようとする場合には、選択肢の数を減らす事による経済性が、実際には弁別特性の序列的な優位性を規定しているということが指摘されている。<sup>39)</sup>

単位，例えば音節や記号素や自由形式や言表や言述などの分節によって，時系列上の混濁を起こしていると考えなければならない。発音と聴取の場面では確かに音素の時系列は正確に反復される。しかし，その反復の根底に線の連続性を前提することはできない。音素の聴取が音声的連続性を前提にせず，専ら不連続性に依拠するのは，音素の微視的特性によるのではなく，分節単位一般の量子性によるのである。音素の反復的同一性の構造と同様に，その上位の単位の反復的同一性も非連続的かつ非継起的であると考えなければならない。略称や逆言葉などが可能なのもその理由からである<sup>(脚注24)</sup>。また，ラテン語のような格変化のある言語では修辞上の効果のために一つの文の中で語順を変更することが比較的自由にできる。語順を変えられた文同士が言語学的に同一の価値を持つと同時に，語順の同じ文同士が文脈によっては言語学的に異なった価値を持つこともあり得る。つまり，分節の内部は常に同時的にあると考えるべきなのだ<sup>(脚注25)</sup>。もしもこれが言語の体系的な事実でないとするならば，言語学は時系列上の音声学的な記述でしかないことになるだろう。

### 3.2 音素標記の疑似合理性

純粹に全ての言語の音素を記述する文字が実在しないのは，周知の事実である。言語学では，通常，ラテン文字が音素記述の手段として使われる。国際音声学協会（International Phonetic Association）が制定した国際音標文字（International Alphabet）は<sup>(脚注26)</sup>，ラテン文字に幾つかのギリシャ文字や人工文字や発音区別符（diacritical signs）を加えて作られた<sup>(脚注27)</sup>。元々は，音韻論的単位の記述ではなく言語の音声学的記述のために作られたこの標記が，現在では多くの言語の音素記述に使われているが，実際には各言語毎あるいは言語学者毎に変更して使われている。ラテン文字によって全ての言語体系の音素を一律に記述しようとするため，この標記は正書法よりも構造が複雑である。正書法は，各言語の音素体系に合わせて文字を配分したり，文字の前後関係によって発音を確定するようにして使われる。文字に付加的に追加

- 
- (24) ヤコブソンは，音素の自律性が，語を完全に自動化された不可分の凝固した単位ではないものになると述べた。そして，幾つかの音素の倒置の例を挙げている。<sup>40)</sup>
- (25) 隠喩などの修辞上の事実は，言語の分節内の同時性と固定性の静止的性質とを一致させている。これは文字の線状性と文脈の継起性との混同とは質の異なる問題である。後者は，単なる隣接関係による混同，あるいはせいぜい一方向性という類似による混同でしかない。それに対し前者は，元々活動体と固定性との関わりにおいて起こる単位と機能あるいは単位と別の単位との交換の場を表している。つまり，活動体における単位の発生はそれ自体が既に固定性の現象である。
- (26) 国際音標文字は，辞書などに発音記号として使われているが，統一されておらず，場合によっては全く独自の記号を用いる場合もある。これ以外にも音標文字は様々なものがあり，複雑なものでは，オットー・イエスベルセン（Jespersen, Otto）が作った「非アルファベット式表記法」がある。これは，ギリシャ文字とアラビア数字を主体として作られた表記法で，例えばこれを使って英語の「m」音素を表すと「α0 δ2 ε1」となる。
- (27) 発音区別符は，文字本体に様々な記号を付けて類似の音素同士を区別する手法である。ドイツ語のウムラウト，フランス語のアクセントなどがその例である。

される発音区別符は、ラテン文字による言語の正書法ではよく使われる。ラテン文字を使う言語の中で、発音区別符を使用しないのは、英語とオランダ語くらいで、ヨーロッパ系の言語を含めて殆どのラテン文字使用が、この発音区別符を伴っている。ラテン文字表記によってほぼ正確な音素標記を実現しているポルトガル語、チェコ語、ポーランド語などは、比較的多くの発音区別符を使っている<sup>(脚注28)</sup>。この発音区別符の付加のおかげでなんとか、様々な言語が共通のラテン文字によって表記されるという状況が保たれているのであるが、中には発音区別符の付加が単なる歴史的な経緯によるものでしかなくなっているものも部分的にはある。正書法の綴りそのものが言語の現状とかなり食い違っている現状では、発音区別符の付加が音素標記のためとはもはや言えないこともある。この発音区別符を付加した文字がなぜ別の文字に変形しないのかという点に関しては、元々の文字が伝達された歴史的な経緯を考えればその理由が理解できる。

ラテン文字の広範囲の流用は、歴史的には何段階もの過程を経ているが、中でも一番大きな要因は、ローマ・カトリックの教会言語であるラテン語の使用とキリスト教的な文字教育である。ラテン文字の流用は、自然な伝播というよりは、かなり意識的に行われる傾向がある<sup>(脚注29)</sup>。例えばベトナム語の表記は、イエズス会宣教師の発案に基づいて漢字からラテン文字に変更された。ベトナム語のラテン文字表記には、印欧語系の文字表記に比べて発音区別符の数が多く、かなり無理をしているのがわかる。インドで使用されている様々な文字は、ラテン文字の場合とは異なり、アラム文字の流用が比較的自由かつ自然に伝播して成立したため、全て同じ系統ではあるが、各々がアラム文字の原形を止めず、非常に多様性を持っている。

(28) チェコ語とポーランド語には、子音標記にも発音区別符を使用する。これによって擬似的に音素標記が成り立っている。それ以外のラテン系、北欧系の言語には、母音標記の発音区別符しか使わない。

(29) 土着言語の文字化は、その殆どが宗教用の言語との二言語併用に始まる。ラテン文字とアラビア文字がその代表である。近代になるとこれに言語の世界戦略的な意図が加わる。フランス語や英語やロシア語などがその例であるが、その先例になったのがスペイン語とポルトガル語である。日本も一時期その後を追おうとした。今日このような戦略を引き継いでいるのは英語だけである。極めて雑種性が強く、言語の管理体制を持たず変化の激しい英語は、遠い将来、次第に全く中立的な固定的書記言語すなわちラテン語やアラム語に相当するような言語を後に残していくと考えられる。ただ、現時点での言語戦略は、まだそのような中立化の段階の遙か手前に位置する。言語の世界戦略において、言語的な覇権が簡単にいかない場合は、その戦略はまず元々使われていた文字のすげ替えから始まる。モンゴル、トルコ、ベトナム、マレーシア、シンガポール、インドネシア、フィリピンなどがその例である。フィリピンではタガログ文字など元々あった豊富な文字の使用がそのおかげで全て消えてしまった。文字の流入は建前上は文化の流入を伴うはずであるが、実際には識字能力による差別的流入を伴う。文字のすげ替えが終わると次は言語の流入である。それによって更に言語的差別が流入する。文字のすげ替えに対抗しようとする力もあり、モンゴル文字の復活、韓国の漢字使用、ヘブライ角形文字の保持、ギリシャ文字の使用なども、各々の事情は異なるがその例である。以上のような様々な動向は、勿論、強制的に無理矢理進められたものではない。ある種の合理性が根拠となった主張がそこには必ず伴うため、当然全ては自発的に行われる。しかし、たいていの場合、ラテン文字的合理性のような内容のない主張の流入だけが残ることに気付かされる。

る(脚注30)。ラテン文字は、それとは対照的に、その元々の原型をかたくなに維持している。その頑さは、歴史上何度も、ローマの伝統的な書体が復興していることにも現れている。例えば、ゲルマン系の民族は、キリスト教化される以前に一、二世紀頃からギリシャ・ローマ系の文字を流用して変形したルーン文字を碑文などに使用していたが、後にロマンス系、アイルランド系の宣教師達によってキリスト教化されるに従って、ゲルマン諸語には、古典的なラテン文字が使用されるようになった。ルーン文字の最後の名残がアイスランド語の標記に一文字だけ残っている。また、十五世紀に活字印刷術が普及し始めた頃、殆どの印刷書体はゴシック書体の系統であった(脚注31)。これは、中世の手書き写本で使われる合字 (ligature)、すなわち隣同士の文字が連結して一つの文字になる特殊な文字を多く含んでいた(脚注32)。このような変形された特殊な文字の使用は、本来は文字の流用に伴って自然に書体の多様性を産み、やがては別の文字体系と呼べるようなものができあがるはずであるが、ルネサンスの文芸復興運動に伴い、古典的なローマ書体が次第に流行し、ゴシック書体にとって替わることになると流れは逆行し始める。ドイツでは、ゴシック書体とその後も長く印刷に使われ続けたが、二十世紀になってついにローマ書体に移行した。ドイツ語の標記には、その若干の名残が今でも残っており、それを古典的なラテン文字の原型に戻すことの是非が議論されている。このようなラテン文字の頑さは、発音区別符を常に文字の本体から分離した状態におき、それを文字の本体に後から付加するものと位置づける。

ギリシャ文字は、セム語系のフェニキア語のための子音文字であるフェニキア文字を受け継ぎ、その中にあるギリシャ語で使わない子音文字を、母音の標記に転用して出来ている。文字の音素標記の原則は、ここで生まれたとされている。現代のギリシャ語の表記にも、古代とほとんど同じ文字が使われているが、現代ギリシャ語の発音で読みやすいように、いくつかの発音区別符が追加されている。現代人が古代のギリシャ語を読むために古典ギリシャ語にも発音区別符が追加されるが、現代ギリシャ語の表記における発音区別符は、ほぼ常態化している。

(30) インドには、公用語が十五もあり、文字は代表的なものだけでも十を越える。デーヴナーガリー、ウルドゥー、グルムキー、グジャラート、カンナダ、マラヤラム、タミール、テルグー、オリヤー、ベンガル、シンハラ、マルディブなどがある。

(31) 活字印刷術の初期の段階では、手写本に倣って用途に応じた様々な書体が使われていた。手写本の装飾的な機能などもそのまま受け継ごうとしているため、横に繋がった文字も忠実に再現された。この状況が変化していくのは、印刷技術の普及に伴う経済的な事情も大きい。ラテン文字復興という外的な要因も強い。書体に付けられたゴシックという呼び名は、野蛮という意味の蔑称であり、中世的なものの蔑視が古代崇拜の裏側にある。文字の単位は、印刷術を初めとする新しい技術によって確定されたというよりは、古代の碑文文字の模倣という意味合いが強かったのである。<sup>41)</sup>

(32) 合字 (ligature) の名残は、フランス語では「oe」、ドイツ語では「ss」あるいは「sz」、デンマーク語とアイスランド語では「ae」などがあり、これらは現在では一文字として扱われる。ローマ書体にも当初は合字が含まれていた。「ss」はローマ書体でも連結していたし、「st」「ct」「si」なども連結していた。

新約聖書のギリシャ語を表記したギリシャ文字は、キリスト教東方教会によって維持され、現代ギリシャ人の民族意識によって更に若干の保守性が加わる。保守性を伴った古代文字と言語の現状とのずれが発音区別符の付加的構造を産み出したとも考えられる。しかし、ギリシャ文字の場合、見出しなどで大文字表記をするときには、発音区別符を付けない。従って、ギリシャ文字の場合、発音区別符はあくまでも補助的な記号と見なすことができる。これは丁度、伝統的なヘブライ角形文字によるヘブライ語の表記における母音記号と同じような復古的な意味合いを持つと同時に、言語の発音をあくまでも記録の中で忠実に保守したいという欲求に基づいており、疑似合理性ではなく歴史的正当性に立脚したやり方である。キリル文字は、ギリシャ文字を受け継いでできた文字であるが、元々は、九世紀にスラブ語系の古ブルガリア語の音素に対応させるために、新たに文字を付加して作られている。その後、主としてキリスト教東方教会によるギリシャ正教と共に、ヨーロッパ東部の主にスラブ語地域に広がった。キリル文字は、比較的新しく作られただけあって、スラブ語系の諸言語にはうまく適合しており、スラブ語系の標記の場合には発音区別符は必要ない。この文字はその後、二十世紀に、ソビエト連邦の政策によりスラブ語系以外の様々な言語の表記に使われるようになった。そのため、トルコ語系、イラン語系などの中央アジアの言語を表記する場合は、発音区別符を組み合わせた形の文字を追加する。だが、この場合はどちらかという文字の追加を伴った流用という意味合いが強く、発音区別符の付加的構造はない。

発音区別符は、活字印刷においては、文字の本体に付加された状態を一つの活字として、全ての使用する組み合わせを用意することになる。例えば、ドイツ語には四個、スペイン語には七個、ポーランド語には九個、フランス語には十三個、チェコ語には十五個、ポルトガル語には十七個の組み合わせ文字がある。また、ベトナム語には小文字の a だけで十八個もある。ギリシャ語の場合はアルファだけで二十六個もあるが、これは先に述べたとおり、省略することも可能であり、補助記号の付加に関する技術的な問題にすぎないと見なすべきである。ラテン文字における発音区別符の付加的構造は、ラテン文字本体の形をあくまでも保守することを要求するのであるが、その要求はラテン文字本体の単純さと普遍妥当性を根拠にして正当化されることも多い。しかし、発音区別符を付けなければ音素を標記できないのであれば、それはラテン文字の音素標記における無理を表している。発音区別符を付けるよりは、新しい文字を追加する方が実際にははるかに合理的である。ラテン文字の優位性とは、実際には、キリスト教的な言語教育と文字教育およびその後の古代崇拜が強力にラテン文字化を広め、活字印刷の経済的な理由による書体の画一化が更に文字の保守性を強化したという歴史的な要因による優位性でしかない。この背後には、組み合わせ文字の付加が文字体系の変更を意味するのか、それとも同じ文字体系が若干の修正によって様々な言語の違いを乗り越えてうまく音素に対応し得



ていることを意味するのかという解釈上の対立において、かなり意図的に後者に荷担しようとする圧力の存在が浮かび上がってくる。これは、ラテン文字の優位性が歴史的に限定されているということを意味するだけではない。また、音素標記的合理性における別の可能性を示唆するものでも全くない。むしろ重要なのは、音素標記という疑似合理性を通して、音素という単位そのものの構造的優位性という考え方が、逆にラテン文字の使用を根拠に成立しているものですらあるということなのだ。

ラテン文字、ギリシャ文字、キリル文字というヨーロッパ文字以外の様々な音声表記文字を見てみると、文字の独自性の中にラテン文字で言われているような類の音素標記的合理性が保たれているものがあるわけではない。例えば、セム語系のアラビア文字やヘブライ文字のように、子音標記に補助的に母音標記用の記号を付加するような場合、原則として文字は元々前後関係の中に音素の標記を侵食させていたと考えねばならない。なぜなら、この場合、通常の文字使用では母音標記をしなくても読み上げるのに支障はないからだ<sup>(脚注33)</sup>。つまり、離散的な文字として見た場合の多重的な冗長性の一部が音素の記述に利用され、有効な情報として機能するといったようにである。また、元々サンスクリット語の表記のために整備され、現在はインドの文字の代表格となっているデーヴァナーガリー文字は、言語学的な性質の叙述をほぼ完全に含んでいると言われている。インドの古代サンスクリット文学は、この文字の性質に多くを負っていると考えられ、その記述の正確さは十九世紀に始まる西欧近代言語学の手本となったと言われている<sup>(脚注34)</sup>。もしも、音素標記も含めた言語の完全な音韻標記を求めるならば、デーヴァナーガリー文字を使うのがいちばん合理的だと言うこともできる。しかし、この文字の仕組みは西欧の合理性の基準を越えており、単なる音素の同一的標記に使う文字として見た場合には少々複雑過ぎるのだ。

音素標記に関して重要なのは、ギリシャ文字が多く見積もっても母音標記を横に連ねただけの冗長な文字表記でしかなく、そのおかげで文字の線状性が音素的な継起性と混同される原因を作ってしまったという点である。この混同は、一見すると合理的に見えるが、活動体の純粹性に向かって一步踏み出すと必ずしもそうとは言えない。音韻的価値体系としての言語の性質から考えるとむしろ音素的継起性は必ずしも全面的に復元される必要は無く、それが必要以上に復元されることにより、知覚上の音韻連鎖は逆に不自然に連続性を延長してしまう。極端な

(33) 漢字にルビを振らなくても読めるのと同じことである。もっと近い例は英語の場合で、表記が発音と対応していないことが多いのに、発音を示さなくても読むことはできる。

(34) デーヴァナーガリー文字で表記されたサンスクリット語の古代文献がサンスクリット語の発音を忠実に再現していたため、十九世紀の西欧近代言語学は、印欧語の原型を類推することに成功した。それに対し、ラテン文字による記録は古い発音の再現には役に立たないことが多かった。今日でも、ラテン文字は現在の発音の痕跡を残すのに役に立っていない。<sup>421</sup>

ことを言えば、音素的な継起性は、部分的には文字の発明における怠慢に起因した派生的な遺産である。文字を平面上に構築し直す作業は、かなりの思考と努力と指導性を要するため、音素の線状表記は、そのような作業の単なる省略に過ぎない。音素は、ギリシャ文字という文字の冗長な線状性と音素的継起性との隣接関係から習慣づけられた継起的音韻知覚が、言語分析の手段としてラテン文字を使用した場合に、継起性が紛れ込んだまま判明なものとして強調された単位である<sup>(脚注35)</sup>。音素の弁別特性が、音素のより小さな単位への分化とする仮説、音素の幾つかの弁別機能とする仮説、音素の自己同一的な性質とする仮説などが、互いに音素の構造を違ったものに定義しながら、音素という単位そのものに関しては共通の場を共有しているのは、ラテン文字が音素の弁別特性を線状に表記していないからに過ぎない<sup>(脚注36)</sup>。ラテン文字が表記しているのは、弁別特性の機能が別のものへと受け渡される時に、その受け渡しの次の段階を保留した中間段階の固定性である。ラテン文字あるいは元々のギリシャ文字は、活動体が弁別活動の一時的保留を音素として囲い込み、元々その保留の場そのものであった固定性へと引き渡してしまう時に、たまたま都合良く呼応しているように見えたものに過ぎない。音節を構成する下位の単位としての音素という図式は、それ自体がギリシャ文字による独自の発明の帰結であり、純粋な隣接関係の産物であり、つまり純粋な恣意的虚構であり、しかも一度決定したら絶対に変えることの出来ない恐怖の固定性である。これは、客観的記述の領域にあると言うよりは、歴史的絶対性、虚構的決定、あるいは事実に固定性への任意の書き込みなのだ。この種の決定に比べれば、実証性一般は歴史的相対性に過ぎない。

### 3.3 単位の連続性

ラテン文字は、各国語の音素に適合させるため、発音区別符を使用することはすでに述べた

(35) 勿論、我々は音素の実在性を疑う必要はない。むしろその実在性を固定性の中に別の形で位置づけることが重要なのである。音素を虚構の単位であるとする説は多少流行ったらしく、ヤコブソンが反論を加えている。まず、音素が仮構であるという意見が何ら必然的な対応物も持たないと言う意味で言われている場合は、それは単なる哲学的な態度の問題でしかない。つまり、音素は初めから、その実在性の要求を音声の物理的生理的面に關する知識によって満たすことができるような科学的な仮構としてしか扱われていないということである。また、言語の実在性は語だけであって音素は実在性を持たないという意見に対しては、確かに語だけが実在性を持つような状況はあるが、それはむしろ言語の病理学的事実を反映しており、そこから却って正常な言語使用における音素知覚が判明に確かめられるということである。ここでの病理学的事実とは、配列失調の失語症のことで、この場合は、実際に連続的な発音としての語の使用が言語の最小単位になる。それに対し、正常な言語使用においては、語は「完全に自動化された不可分の凝固した単位」として知覚されるのではない。つまり、音素は語の連続性の仮構的な切り取りではなく、不連続な「自律性」を持った単位である。ヤコブソンは、音素の自律性を示す音素の倒置の例をいくつか挙げている。「cabaret>baré-ca」「les princes>linspré」「un sot pâtre>un pot sale」「tendez votre verre>vendez votre terre」「mort de faim>fort de main」。しかし、これらの例は音素が必ずしも継起的にはなくそれ自身ある程度同時に群化していることを表わしている。<sup>43)44)</sup>

(36) 音素の同定に関しては、言語学者によって様々な意見の対立がある。<sup>45)</sup>

が、これは、音素標記を発明したギリシャ文字の元々の単純さからは少し後退している。もしも、ラテン文字が、発音区別符を分離できない追加文字と書体上の変形を受け入れていたら、ギリシャ文字と同じような正当性を得られたかもしれないが、それではラテン文字の覇権的な欲求は満たせないことになる。この矛盾を焦点としたせめぎ合いは、印刷技術やタイプライターのおかげで、ラテン文字による画一化の方に軍配が上がった。また、ラテン文字には、いわゆる連字 (digraph) すなわちいくつかの文字を連鎖させて一つの音素に対応させる手法が使われている<sup>(脚注37)</sup>。これは、ギリシャ文字が最初に母音標記を行ったのと同じ発想である。この手法は、音素標記に限って言えば、発音区別符と同じか更に複雑なやり方で文字を平面上に配置して組み合わせるやり方と機能的には変わらない。つまり、他の多くの音節文字や子音文字が持っている配置と変形の過程と発想的に異なっているわけではないのだ。線状に連ねてこれを行ったのは、単なる偶然か怠慢によって生じた欠陥である。なぜなら、これによって文字は音節を標記できなくなってしまったからだ。音節が標記できないと、とりわけ文字は不必要な連続性を帯びてしまい、表記上の不一致が温存されることになる。これを放置すると、英語のようにしばしば綴りと発音の対応が不規則なものとなる。フランス語は、これを意図的に整備したためある程度整合性がとれているが、やはり完全には修正できていない。また、合字 (ligature) は単なる書体上の連続性であるが、これもラテン文字においては役割があやふやなため、文字の切れ目を更に曖昧なものにしてしまう。ラテン文字による表記は、このような理由もあって、連続性を断ち切るために空白を必要とする。この空白で語を切り離す方法は、全く切れ目がないギリシャ語の古代碑文や日本語の表記などと比べると、確かに便利なやり方ではある。ただし、そこには連続性を内部に囲い込む効果もあり、やはり不必要な連続性に起因する表記上の不一致の温存に荷担してしまう。したがって、文字体系に限って言えば、ラテン文字の不可分な単位は、空白で区切られる文字連鎖すなわち語であると言うこともできる。つまり、ラテン文字は表音文字ではなく純粋な表意文字に分類した方がよい場合があるのだ。純粋な表意文字としてのラテン文字という分類は、英語のような複雑な表記にとりわけよく当てはまる。このことが意味するのは、文字の音素標記というのがまやかしであるということではなく、文字の単位というものは実際には特定できず、全く不確定だということなのである。

(37) 連字という訳語は必ずしも適切ではなく、復子音字と訳した方がよいが、収まりが悪いので連字 (digraph) とする。日本語で連字というと合字 (ligature) を指すこともある。復子音字は、二つの子音字が組み合わさって一つの子音を表記する場合に使う。「th」「ch」「ph」「gn」などがその例である。このやり方を徹底してやると、アイルランド語の表記のように、視覚的な違和感はないがどこを読んでいるのかさっぱり分からないものになってしまう。

## 4. 文字の単位と意味

### 4.1 単位の統合と意味

固定性としての文字は、言語に関する多少とも理論的な錯綜状態の囲い込みの場として、その単位を書き込まれる。それ故、文字の単位は、言語学的な虚構でもある。しかし、その反面で、活動体としての言語は、自らの内部に同じような囲い込みの場を、全面的に固定性に寄りかかった状態から派生させるのである。言語の最小単位といったような離散的情報の媒体が言語に実在するのか、あるいは実在したのかは、必ずしも確かではない。言語の単位を、純粋に独立した活動体としての言語の内部に確定しようとする、ソシュールが言うように最終的に言語には差異しかないと結論づけねばならなくなる。言語は、離散の単位の複合体として発音され聞き取られた音声から、意味という単一情報に向かうに従ってその実体を希薄にする<sup>(脚注38)</sup>。意味が辞項相互の関係を通じた段階的な総合である以上、意味の解釈は、微視的な離散的情報を基準にして見た場合、冗長性の段階的増大を伴う。一つ一つ関係が同定されていくに従って、情報は反復的に重なり合い、各々の状態は相互に順次統合され、ある一つの状態の確率が極端に増えていく。このようにして、意味は全体として言語の離散的情報を消滅へと向かわせるのである。ウォレン・ウィーバー (Weaver, Warren) は、言語の意味を量的に扱う糸口を通信理論が与えてくれると述べた。

「通信理論において展開された情報の概念は、最初はつまらないものであり、異様なものであるように思われる。即ち、それは意味と何の関係もないということでもつまらないものであり、個々のメッセージを取り扱うものではなく、メッセージの集合全体の統計的性質を取り扱うということでも異様である。さらにまた、この統計的關係の中で、情報と不確定度という二つの言葉が仲間になっているということも、異様なことである。しかし、これはただ一時的な反発に過ぎないであろうと私は思う。そして、結局は、通信理論によって、始めて意味に関する真の理論への準備が整ったと言うべきであろう」<sup>(47)</sup> 「マルコフ過程に関する強力な理論体系を利用しようという考えは、意味論的研究にとって特に有望であると思われる。それは、この理論は意味の最も重要でしかも難しい側面の一つ、すなわち文脈の影響を処理するのに特に適しているからである。情報と意味は、量子理論におけるカノニカルに共役な変数の対に似たもの

(38) 意味は、ここでは翻訳における同一性のような最大公約数的な虚像を指しているのではない。このような同一性は、文字通り情報の最大公約数であって、理解の媒体ではない。言語の体系的な複数性を頼りにする意味の定義は、結局のところ意味の普遍妥当性という漠然とした世界を想定しているに過ぎない。意味とは二度同じ事を言うことではなく、二度言うことを一度で済ませることである。<sup>46)</sup>

であり、人が他人に対して強要しがちな犠牲を非難するようなある連合した拘束に従っているものであることがわかるという、漠然とした感じを誰でも持っている。またあるいは、意味は、熱力学的集合のエントロピーが依存している量の一つと類似したものであることが分かるであろう」<sup>48)</sup>

ここで述べられている意味という表現は、情報の有用性や価値を漠然と言い表しているように見える。マルコフ過程に含まれる情報量を調べていけば、離散的情報の全てが役に立つわけではなく、有効な情報は元々の単位によって可能になる情報よりもかなり少ないということがわかる。つまり、単位の確定からその性質の確定に至るような有用性の発見の過程には、情報量の減少が伴っていることになる。情報の有用性や価値や、ましてや意味といったような機能的要因が、離散的情報の内部に元々備わっているとは考えない方がよい。情報と不確定度は定義上等しいものであるのは当然だが、意味はそれとは逆の方向を向いている。意味は、情報の持つ性質の確定を含めた、情報の利用や使用や消費という活動体の動作の中に、すなわち一時的に保留された単位による機能の段階的な受け渡しをとりまとめた単位の統合過程の中にあるのであって、情報の階層構造にあるのではない。この段階的な受け渡しは、マルコフ過程が多重化するにつれ状態の数を減らし、最後には二つの状態の集約的交換の最終段階において、全く別の固有名へと受け渡される。活動体としての言語と固定性としての文字との関係の中には、このような受け渡しによる任意の交換という関係がある。活動体と固定性は、両者が分離されれば一方は端的な消滅へ、もう一方は自然な崩壊へと向かい、両者が結合されれば一方は構築された消滅へ、もう一方は線的な増殖へと向かう。意味はこの関係の中で専ら活動体の側にその領域を持つ。意味は、離散的情報の完全な消滅へ向けた定性的な圧力であって、量的な増大では勿論無い。意味は活動体としての言語によるそれ自身の消滅だけを定義している。だが、活動体を単独に取り出して定義することは本来できない。活動体はその活動を固定性に全面的に負っているからだ。我々の通常理解している意味生産の行為は、端的に言えば固定性すなわち文字の全体に寄りかかっている。そして、意味とは、書き込みに関しても読み取りに関しても、活動体から固定性への文字の線的な受け渡しに過ぎない。

## 4.2 固定性と意味

固定性としての文字の側から見たとき、人間的にであれ言語的にであれ、意味の理解が最終目的にならないことはいうまでもない。意味を一通り理解しても、文字は更に深遠な意味の潜在性として先送りされるので、読まれていない文字といずれ理解されるべき意味とは同じものになる。そこでは、固定性としての文字が、その都度目的でもあるかのように振る舞うのである。固定性としての文字の存続は、増殖するか崩壊するかに関わらず、固定性そのものを根

拠として無際限に続くはずである。もしも、その無際限性そのものに改めて目的を設定するならば、それは、固定性としての文字が現時点で描き出す不確定な配置と分布に求めるしかない。部分的であれ、全体的であれ、到達点としての意味という別世界を前提にした考察は、ここでは永久に具体性を持ち得ない。もしも、文字が様々な単位に分節し、相互に関係しながら複雑な機能を実現しているように見えても、それは最終的な姿ではない。文字は、そのような機能をまとめ上げて行き、最終的に一つの意味にたどり着くのではなく、むしろ、我々はその先でより強化された固定性としての文字の部分と全体に出会うのである。文字は、部分的な意味にも全体的な意味にも還元できない。文字の個々の機能は、最終的に、意味の理解ではなく固定性の構築にのみ関わっていると見なすべきである。

固定性としての文字はそれが伝えようとする意味に対して、常に過剰に存続するものであると同時に、常に不十分なものである。この文字の不十分さは、文字が言語活動の一部として考察されるときに常に言われてきたことである<sup>(脚注39)</sup>。文字が不十分であるということは、文字が単なる現時点での過去からの残存物であるだけでなく、外から構築の動機を与えられてもいることを示す。この構築の動機は、固定性の側から見たときに、最終的には静かな沈殿の継続となって現れる。これによって、不動の沈殿物は、連続的な決定を引き延ばされることになるし、それを中断されることにもなる。しかし、この不十分さによる構築の動機は、欠如とその充当という単純な構造を持ってはいるが、文字の蓄積の根拠にはならない。むしろ、これは固定性が常に連続的な決定の途中にあること、継続ではなく単なる未完了の状態にあることを表している。このような固定性の前で、意味がその都度自らを消していくときに、初めて固定性は残存物としての蓄積を部分的に根拠づけられるのである。

このように、潜在性としての意味を指向する何らかの作用の行程がなければ、固定性としての文字は惰性的に崩壊していくだけで、その蓄積を継続し得ない。意図的な意味という虚構の裏側に改めて静的な蓄積の作用を発見できれば、固定性は少なくとも増殖し得るものと見なせる。ただ、固定性にとって、増殖は完全に外的な要因による外的な出来事である。固定性は、増殖作用のような動的なものの一切を外側へと排斥する。固定性そのものは、増殖作用には一切関知しない。それに対して、意味が固定性の増殖作用に関わるならば、それは反固定性としての潜在的な流動性をその領域とするだろう。活動体としての言語は、口語に限定された場合には、そのような流動性の法則の有力な一部分であるし、限定されない場合には、その全ての

(39) 文字は常に言語の不完全な二次的な代替物と定義されてきた。ジャック・デリダ (Derrida, Jacques) は、逆に言語は元々書記的なものであると分析している。デリダの分析は、口頭言語の根底に書記言語の活動性を見つけようとしており、文字を活動体と見なしている。文字を一種の動態と見なす考え方は、主に構造意味論や新批評などによる機械論的な言語解釈の中に見られる。<sup>49)50)</sup>

法則を規定している基本構造である。流動性は固定性の潜在的な質量であり得るし、その逆でもあり得る。流動性としての意味と固定性としての文字は、相互に移行可能である。それでは、そのような関係の中で、流動性全体の痕跡が直ちに固定性の増殖と見なせるのかというと、そうはならないだろう。流動性は全体化によって逆に固定性を自らの痕跡の流動化として無差別に囲い込み、固定性と流動性は結局のところ対立を拡大することになるからだ。全体として相互に転換し合うのではなく、両者は複雑に交錯しその対立を内包し無かったことになってしまうのである。固定性から流動性への部分的移行を全体化によって端的に否定することはできない。あくまでも部分的な流動化の場から固定性の増殖を記述する必要がある。

意味は部分的にも反固定性として振る舞う。そして、部分的な場では、まず流動化への手続きが先行しているように見える。これによって流動化は安定した意味作用と見なされる。意味作用は部分的固定性から部分的流動性への交換あるいは消費と見なすことができるのであるが、これがただ単に固定性に対抗する作用でしかないならば、我々が意味を理解すると感じたときに行っているのは破壊活動でしかないだろう。しかし、この作用は逆に解釈することも可能である。例えば、意味の理解は複数の理解の保留に対応し、逆に非理解の場の反復的強化と等しく、そこに意味の痕跡とは無関係な分節を浮きさせる。このような限定的な浮き出しが段階的に固定性の多重分節を根拠づけるならば、固定性としての文字の消費の行程は、同時に構築的な生産の行程として記述することも可能となるかもしれない。だがこの場合に、固定性の多重分節に関わっているのは、意味というよりは、段階的な単位と機能の定立である。ここには、いわゆる意味作用と呼ばれる行程がある程度関わっているように見えるが、その関わり方は、どちらかという分節の機能が曖昧な単位への埋没という形をとる。語や文や言説や言述といったような単位として厳密とは言えない消極的同一性に、消極的差異である意味作用は専ら潜り込むのである。意味作用は、実際には流動性そのものに属すると言うよりは、逆に段階的な多重分節の過程における流動性の恣意的で唐突な部分的停止に過ぎない。意味作用は、言い換えると機能的な流動性の一時停止として、流動性の外部すなわち固定性の内部へと移行する。意味は、そこでは流動性による固定性の段階的な多重分節の形を手掛かりにした、固定性の恣意的なくびれ目である。かくして、意味は実際に固定性の内部にある反固定性において見出されることになる。このような意味作用の行程の中で作られる内的な反固定性の形こそが固定性の増殖に最も深く関わっているものであろう。

## 5. あとがき

文字はその全体の前後関係から見ても単一のものであり、全体として有るか無いかという状態で止まっている等確率の二者択一であり、したがって読まれていない文字には冗長性がな

い。読まれるに従ってそこには単位が発生し、冗長性が発見され、単位は消滅する。巡り巡って最終的に全体として有るという確定状態に到達する。そこには有効な情報は最早存在しないのだが、冗長性があるか無いかという、等確率の二者択一が残される。他の全ての選択肢に開かれた可能性が文字の側に有ると見なすべきなのか、あるいは文字は忘却とともに無かったことにされると見なすべきなのかは、純粹に心理的な問題である。両者は文字の問題としては両立可能である。いずれにせよ、意味は、書き込まれた文字連鎖の中にあるのではなく、それが読み取られ、解読され、解釈され、関係性の全体的な平衡状態と共に消滅したときに、その消滅の中にある。そして、その消滅によって、固定性としての文字は全てがそのままの形で残される。有るか無いかの二者択一という不確定状態がその残存の仕方である。

#### 参 考 文 献

- 1) 古屋俊彦：「文字の存在論」(国士館大学情報科学センター紀要第20号所収)，国士館大学情報科学センター，東京，1999。
- 2) Saussure, Ferdinand de: *Cours de Linguistique Générale*, Payot, Paris, 1916. (邦訳 フェルディナン・ド・ソシュール『一般言語学講義』小林英夫訳，岩波書店，1940年，p. 19)
- 3) Saussure, Ferdinand de: Ms. fr. 3951(BPU)N9(1893-4)N11N12(1894-5) in *Cours de linguistique générale: édition critique* (éd. Rudolf Engler), Otto Harrassowitz, Wiesbaden, 1967 (1893-4, 1894-5). (邦訳 フェルディナン・ド・ソシュール『書物の草稿』前田英樹訳「現代思想」1980年10月号所収，青土社，1980年，p. 67)
- 4) Saussure: 1967 (1893-4, 1894-5). (邦訳 p. 67)
- 5) Saussure: 1967 (1893-4, 1894-5). (邦訳 p. 76)
- 6) Saussure: 1916. (邦訳 p. 108)
- 7) Saussure: 1967 (1893-4, 1894-5). (邦訳 p. 68)
- 8) Saussure: 1967 (1893-4, 1894-5). (邦訳 p. 69)
- 9) Saussure: 1916. (邦訳 p. 113)
- 10) Saussure: 1916. (邦訳 p. 115)
- 11) Saussure: 1916. (邦訳 p. 115)
- 12) Saussure: 1916. (邦訳 p. 157)
- 13) Saussure: 1916. (邦訳 p. 145)
- 14) Saussure: 1916. (邦訳 p. 149)
- 15) Saussure: 1916. (邦訳 p. 168)
- 16) Saussure: 1916. (邦訳 p. 168)
- 17) Saussure: 1916. (邦訳 p. 159)
- 18) Jakobson, Roman: *Six leçons sur le son et le sens*, Les Editions de Minuit, Paris, 1976. (邦訳 ロマーン・ヤコブソン『音と意味についての六章』花輪光訳，みすず書房，1977年，p. 99)
- 19) Jakobson: 1976. (邦訳 p. 100)
- 20) Jakobson, Roman and Halle, Morris: *Phonology and phonetics in Fundamentals of Language*, Mouton, Hague, 1956. (邦訳 R・ヤコブソン『一般言語学』田村すゞ子・村崎恭子・長嶋善郎・八幡屋直子訳，みすず書房，1973年，p. 95)
- 21) Jakobson and Halle: 1956. (邦訳 p. 97)
- 22) Jakobson and Halle: 1956. (邦訳 p. 100)
- 23) Jakobson and Halle: 1956. (邦訳 p. 118)
- 24) Jakobson, Roman: *Essais de Linguistique Générale*, Les Editions de Minuit, Paris, 1973. (邦訳 R・ヤコブソン『一般言語学』田村すゞ子・村崎恭子・長嶋善郎・八幡屋直子訳，みすず書房，1973年，p. 65)
- 25) Jakobson: 1973. (邦訳 p. 66)
- 26) Martinet, Andre: *Eléments de linguistique générale*, Librairie Armand Colin, Paris, 1970. (邦訳 アンドレ・マルティネ『一般言語学要理』三宅徳嘉訳，岩波書店，1972年，p. 275)
- 27) Martinet: 1970. (邦訳 p. 275)



- 28) Martinet: 1970. (邦訳 p. 23-24)
- 29) Martinet: 1970. (邦訳 p. 13)
- 30) Martinet: 1970. (邦訳 p. 16)
- 31) Martinet: 1970. (邦訳 p. 19)
- 32) Bloomfield, Leonard: *Language*, Henry Holt, New York, 1933. (邦訳 ブルームフィールド『言語』服部四郎・三宅鴻・日野資純訳, 大修館書店, 1962年, p. 98)
- 33) Bloomfield: 1933. (邦訳 p. 98)
- 34) Bloomfield: 1933. (邦訳 p. 99)
- 35) Bloomfield: 1933. (邦訳 p. 101)
- 36) Knowlson, James: *Universal Language Schemes in England and France: 1600-1800*, University of Tronto Press, 1975. (邦訳 ジェイムズ・ノウルソン『英仏普遍言語計画—デカルト, ライブニッツにはじまる』浜口稔訳, 工作舎, 1993年, p. 39-51, p. 156-161)
- 37) Eco, Umberto: *La ricerca della lingua perfetta nella cultura europea*, Laterza, Roma-Bari, 1993. (邦訳 ウンベルト・エーコ『完全言語の探求』上村忠男・廣石正和訳, 平凡社, 1995年, p. 213-259)
- 38) Rossi, Paolo: *Clavis universalis —Arti mnemoniche e logica combinatoria da Lullo a Leibniz—*, Riccardo Ricciardi, Milano-Napoli, 1960. (邦訳 P・ロッシ『普遍の鍵』清瀬卓訳, 国書刊行会, 1984年, p. 309-333)
- 39) Martinet: 1970. (邦訳 p. 285-289)
- 40) Jakobson: 1976. (邦訳 p. 85-87)
- 41) Febvre, Lucien et Martin, Henri-Jean: *L'apparition du livre*, Albin Michel, Paris, 1958. (邦訳 L. フェーブール H.-J. マルタン『書物の出現 上』関根素子・長谷川輝夫・宮下志郎・月村辰雄訳, 筑摩書房, 1985年, p. 203-221)
- 42) Bloomfield: 1933. (邦訳 p. 374-395)
- 43) Jakobson and Halle: 1956. (邦訳 p. 89-90)
- 44) Jakobson: 1976. (邦訳 p. 84-87)
- 45) Martinet, Andre: *A functional view of language*, Oxford University Press, London, 1961. (邦訳 アンドレ・マルティネ『言語機能論』田中晴美・倉又浩一訳, みすず書房, 1975年, p. 6)
- 46) Jakobson: 1973. (邦訳 p. 57)
- 47) Weaver, Warren: *Recent Contributions to the Mathematical Theory of Communication (in The Mathematical Theory of Communication)*, The University of Illinois Press, Urbana. 1967. (邦訳 シャノン『コミュニケーションの数学的理論』長谷川淳・井上光洋訳, 明治図書, 1969年, p. 38)
- 48) Weaver: 1967. (邦訳 p. 39)
- 49) Derrida, Jacques: *De la grammatologie*, Minuit, Paris, 1967. (邦訳 ジャック・デリダ『グラマトロジーについて—根源の彼方に』足立和浩訳, 現代思潮社, 1984年)
- 50) Eagleton, Terry: *Literary theory*, Blackwell, Oxford, 1983. (邦訳 T・イーグルトン『文学とは何か』大橋洋一訳, 岩波書店, 1985年)